

藍を通して「認め合う社会」へ！ 藤沢ブルーハンズプロジェクト

神奈川県 藤沢市 × 株式会社アートモリヤ

取組概要

株式会社アートモリヤが展開する「藍の衣食住芸」と、藤沢市シティプロモーション「FUJISAWA City Love」が融合し、“ポーターレスなまち藤沢”の達成に向けた取組を行う。資源ごみ工場に勤務する知的障がい者がブルーハンズマスター（藍染め職人）として、まちづくりに参画。企業SCR、プラゴミ削減協定の締結、耕作放棄地を藍畑に転換した農福連携等を実現している。



ブルーハンズマスターによる藍染め



藍染めを通して様々な縁が繋がる

基本情報

代表地方公共団体	神奈川県 藤沢市
代表民間団体	株式会社アートモリヤ
他の連携団体等	藤沢市資源循環協同組合、三共自動車学校、藤沢湘南ライオンズクラブ、文京学院大学、(株)ローソン、JPモルガン・アセット・マネジメント(株)、ユニリーバ・ジャパン・カスタマーマーケティング(株)、日本大学馬術部
カテゴリ	障がい者福祉 / 地域振興・交流 / 文化・コミュニティ対策
事業費	
めざすSDGsゴール	
事業化までの期間	2021年5月～2021年11月

取組内容



自動車学校が藍染め制服と教材入れを導入



馬糞が藍畑の肥料となり、コスト削減に貢献

この取組で解決した課題	<p>【事例A】藤沢市は、障がい者が認められるまちづくりを目指し、障がい者の「生きがい」や、健常者とのより良い交流のカタチを課題としていた。</p> <p>【事例B】藤沢市は、(コロナ禍における)子供たちの夏休みの過ごし方を課題としていた。</p> <p>【事例C】三共自動車学校は、地元への恩返しと福祉への貢献活動を課題としていた。</p> <p>【事例D】無印良品テラスモール湘南店は、中高生へのSDGs教育と地域貢献を課題としていた。</p> <p>【事例E】日本大学馬術部は、馬糞廃棄費用の削減化を課題としていた。</p> <p>【事例F】文京学院大学は、海外留学生を対象とした日本文化の体験と、インベーション教育を図っていた。</p> <p>【事例G】JPモルガン・アセット・マネジメント株式会社は、ESG投資に関する社員への研修プログラムを図っていた。</p>
解決に向けた手法	<p>【事例A】藤沢市資源循環協同組合に勤務する障がい者が当プロジェクトにおける藍染めを担当し、官民福の連携を実現。市内コンビニやイベントで販売している。</p> <p>【事例B】古着の「染め直し」藍染め体験会を年間50回以上開催した。</p> <p>【事例C】教材入れを、従来のプラスチック製のものから藍染めエコバッグに転換。藍を通して、藤沢市とプラゴミ削減や災害時支援の協定を締結した。</p> <p>【事例D】利用者減少が課題の公民館を利用し、企業の環境活動や藍染めの「染め直し」文化などを市内中高生を対象に講演。</p> <p>【事例E】衰退の一途を辿る藍農業を市内で展開。肥料は馬術部の馬糞を活用。地元高校や企業の研修場としても利用される。</p> <p>【事例F】海外留学生のフィールドトリップを市内で企画。インバウンド政策との連携も図る。</p> <p>【事例G】社員ユニホームに藍染めシャツを導入することで、障がい者の雇用に繋がる。</p>

取組詳細

事業推進上の各団体の役割分担	株式会社アートモリヤ：藍（藍染め）に関する指導助言、企画の提言 藤沢市：プロジェクト賛同企業との協定や、藍を通じたシティープロモーション事業の促進 藤沢市資源循環協同組合：藍染め業務の遂行（障がい者雇用）
地域関係者との連携方法	【地元農家】藍の栽培における指導・助言 藤沢市内で1500株を栽培 【藤沢翔陵高校】藍の刈り取り作業と加工（葉と茎の仕分け、乾燥作業等） 【市民（藍染め体験者）】藍染め体験を通じた「藍の心理的効果」アンケートの回答 【藤沢湘南ライオンズクラブ】海外留学生（藤沢フィールドワーク、藍染め体験）への資金協賛 【藤沢市議会】手話言語の国際デーにおける藍染めグッズの採用
資金調達方法	自己資金60% 銀行融資30% 地域の奉仕団体による支援10%
資金調達方法の補足	
事業推進上の課題・工夫	第一に、藍染めが次世代の若者らが興味関心を抱けるように、Tシャツやエコバッグ、広告ポスターなどのデザイン、イベント来店時のパフォーマンスや販売価格などの工夫を凝らした。障がい者らの「生きがい・働きがい」を追求し、継続的に藍染め業務が行えるように賛同企業の誘致や藍の需要を高めていくことが、これからも課題となる。そのためにも、出会うヒトやモノを大切に、当事業における社会的価値の向上や、地域から必要とされる存在に発展していく必要があり、単発的なイベントや表面的な協定の締結ではなく、本質的で持続可能な取組を続けていかなければならない。第二に、藤沢市にある資源（モノ・ヒト）を余すことなく利活用し、地域のつながりと認め合える社会を追求する必要がある。当事業への説得力を裏付けするために、文京学院大学との共同研究（藍の心理的効果について）を開始した。

担当者のコメント

「藍が人の心を豊かにする社会に」

SDGs、ダイバーシティといった意識が企業だけでなく個人にも浸透してきました。大量生産を行う企業が地元農家を訪れたり、個人の職人とタイアップするなど、新たな社会価値の創造を図る様子が伺えます。私たちは「人の幸せ」があってこそ、SDGsやダイバーシティであると考えます。

今日の藍ビジネスにおいて、4P施策（製品、価格、販促、流通）のいずれもが分断されている状態であり、日本産の藍（＝ジャパンブルー）は衰退の一途を辿っています。

藍を媒介とした課題解決に挑戦する中で出会う、ヒト・モノ・コトの縁をつなぎ、新たな価値の創造と多様性を認める社会の構築が重要であり、結果として持続可能な藍産業につながり、後世に「美しい日本の藍」を残すことができると確信しています。



障がい者と共に藍の栽培を行う

優良事例応募項目

取組のポイント（3つの視点）	<p>①地方創生SDGsの視点</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会課題解決を地域で行う構造を構築する。地域の繋がりがある藤沢でボーダーレスなイノベーションを生むことで、障がい者雇用の在り方を皆で支え考えるという社会課題解決のための新しいカタチを構築する。 ・持続可能な雇用の発掘を行う。藍染めは染め直しができるため、衣類が汚れたら廃棄するのではなく、染め直すことでリユースが可能となる。これは新規とリポートを並行して獲得できるため、仕事量の確保を可能とし、持続可能な雇用に繋がる。 <p>②ステークホルダーとの連携</p> <ul style="list-style-type: none"> ・社会価値、企業価値の創出を目指す。何を染めたか、誰が染めたかというプロセスとストーリーを発信することで感動と多くの共感を生み、あらゆる企業や店舗がユニフォーム等に採用することで、社会性価値を創出していく。採用企業へは、SDGs / ESG要素に係るモニタリング報告提供を行い、企業価値の向上を協働で図る。 ・藤沢市との連携を皮切りに、障がい者による藍染め、イベント等での市民との交流、地元企業らの藍染めユニフォーム採用、地元農家による栽培指導、金融機関からの社内研修依頼、大学との共同研究など、藍を通して様々な連携が実現している。 <p>③モデル性・波及性</p> <ul style="list-style-type: none"> ・染め直しイベント等を通して、特に幼い子供をもつ家庭からは「服が汚れても染め直しができてうれしい」などといった反響が多く、シティープロモーションと相まって市民からの理解度は日々増している。手話言語の国際デーinふじさわなどでは、聴覚に障害を持つ方々の市民ダンスチームがブルーハンズマスター（障がい者）らが染めた藍染めの衣装を着用した。 ・「藍の心理的効果」について文京学院大学と共同研究を進行しており、藍の医療や福祉分野へ発展に向けたエビデンスを取得している。
----------------	---